

平安時代における 「あくる日」と「またの日」

著者	立本 ルリ子
雑誌名	國文學
巻	92
ページ	257-275
発行年	2008-03-01
URL	http://hdl.handle.net/10112/1199

平安時代における「あくる日」と「またの日」

立本 ルリ子

第一章 はじめに

現代日本語において、「あくる日」は過去もしくは未来のある日を起点とした翌日を指し、「またの日」は未来における漠然とした日を表す。平安時代では、過去のある日を起点とした翌日の意味は、「あくる日」のほかに「またの日」によっても表される。同時代に同じ意味を表す語が存在するわけであって、両者には違いがあると見られる。さらに、「あくる」と「またの」は、「あくる日」「またの日」のほかに、「あくるつとめて」「またのつとめて」などのように時間を表す語を下接することができる。また、平安時代には、「あくる日」「またの日」のほかに「つぎの日」も存在しており、これら三者のあいだでも違いが見られる。本稿ではこれらの語とそれらの相違点について検討する。

なお、調査にあたって使用する資料は、物語や日記など、平安時代の和文のみとする（注一）。引用した本文中の片仮名は平仮名に、旧字体は新字体に書き改めた。また、用例が多少長くなる場合があるが、当該語彙前後の文脈を捉えるうえで必要なものとして、できる限り省略せず、そのまま引用する。

第二章 「あくる」「あくる日」

「あくる」は下二段動詞「あく（明く）」の連体形であり、次にくる日、月、年などについて、△明るくなる▽△朝になる▽△日や年が改まる▽の意で使われる。このような「あくる」に日時を表す語が伴うものには、「あくる日」「あくるつとめて」「あくるあした」「あくる今日」「あくる年」などがある。

そこで、まず、「あくる」に日時を表す語（日・つとめて・

あした・今日」が下接した用例をあげ、平安時代の和文における「あくる」について考察する。

(1) 助ありきしはじむる日、道にかの文やりしところ、ゆきあひたりけるを、いかゞしけん、車の筒か、りてわづらひけりとて、あくる日、「よべはさらになん知らざりける。さても、

とし月のめぐりくるまのわになりて思へばかかるをりもありけり」

といひたりけるを、とり入れて見て、その文のはしになほくしき手して「あらず、こゝにはく」と重点がちにてかへしたりけんこそなほあれ。(蜻蛉日記 下 二〇四)

これは、助(道綱)が病氣回復後に初めて外出した日のことである。ここでは、車の接触事故があった「よべ」に対して、「あくる日」にその相手と思われる「大和だつ人」に手紙を送ったことが述べられていて、夜が明けて新しい事態が生じたことを表している。

(2) 宮、「悦びはここにもうれしくなむ。ただ今悩まして」など聞こえたまへり。中納言、「常にかくのみたまはせむずらむな」とて、太政大臣の御大饗の所に、左右のおとどよりはじめて、参りたまひぬ。明くる日、殿にて、左のおとど、大饗したまふ。あるじのおとどもしたまふ。面白くいかめしきこと、いふばかりなし。(うつほ物語 沖つ白波)

これは、中納言仲忠が妻女一宮とのやりとりの後、左右の大臣とともに太政大臣の大饗へと出向いたが、一夜があけた「明くる日」には、「左のおとど」と「あるじのおとど」の大饗が催されたというものである。ここでは、太政大臣の大饗と、翌日の左右大臣の大饗が対比されているが、太政大臣の大饗が翌朝まで続いたことも考えられる。

(3) かかるほどに、七月七日に、大将殿に、明くる日つとめて、西のおとどより、青色に蘇芳襲、綾の上の袴、三重襲の袴、一重襲の綾搔練の相着たる童、髪丈等しき八人、中のおとどより、赤色に二藍襲の袈、袴同じき八人、北のおとどより、薄物に綾、三重ね

たる女郎花色の汗衫、裯、袴同じやうにて八人、方々より歩み出でて、御前の前裁、松の下に、反橋、浮橋を渡しつつ、色々の糸どもを、一つづつ七夕に奉る。(うつほ物語 祭の使)

この部分は、七夕の日の正頼郎での童たちの様子が記されたものであるが、この直前の本文には、六月十八日から七月一日まで、東宮をはじめとする懸想人たちが、こぞつて、あて宮に贈つた和歌群が記されている。そのため、「明くる日」以降に述べられた事態は、それ以前の事態とつながりがみられない。「七月七日」と、日時が明示されていて、「明くる日」はそれと同日になるが、ここでは、日そのものを表すのではなく、翌日の朝になったことを表していると考えられる。このように、夜が明けることを契機として、新しい事態が始まることを表す場合には、「あくる」が用いられている。

(4) 明くるつとめて、宮より御文あり。

昨日、立ち返りと思ひたまへしかど、「静かならず」とありしかば、心あわたたしくやとて。今宵は、ありとのみ見ゆる寢覚めのわびしきに一人ある

ころの夢や何なる

なほ一人はえこそ。(うつほ物語 国譲 上)

ここは、藤壺が里帰りした二日目の早朝、東宮から藤壺宛の手紙がきた、というものであるが、この部分は前夜の「皆御殿籠りぬ」に続くものであるので、夜が明けて早朝から事態に新たな展開が生じたことを表している。

(5) 我天皇も昨日御幸せさせ給て、ひねもずに御遊ありて、明くる今日は心のどかに、秋の空も曇なく、夜半の月影も隈なく照せり。(榮花物語 卷第二十三)

これは、昨日は朝から晩まで一日中遊んで騒いだが、一夜が明けて、気持ちものんびりし、昼夜を通して美しい秋空であったと、昨日とは対照的な新たな事態の展開を述べたものである。そのために、「あくる今日」として、「今日」を強調したものであろう。なお、今回の調査では「またの今日」の用例は見出せなかつた。

このように、「あくる」は、夜明けによって新たな事態が生じる場合に用いられる。このことは、これらの語に、格助詞

「より」が下接することですらに明らかとなる。

- (6) 「樂はげにおもしろくをかしき事にこそあれど、のちの世まで御身に益なし。四十九日はげにゆ、しかるべし。八講なむこの世もいとたふとく、のちのためめめでたくあるべければ、して聞かせたてまつらまほしき。」とのたまへば、をこ君、「いとよくおぼしたり。こ、にもさなむ思ひつる。さらばとしのうちにしたまへよ。いと頼もしげなくなん見え給。」とて、明くる日よりいそぎ給ふ。八月の程にせんとて経書かせ、仏師呼ばせて、仏きよらなるべくと、をこ君、女君、心に入給へり。(落窪物語 第三)

(7) 「かく重くなり給まで、たれもく告げたまはざりけるが、つらくも。思ふにかひなきこと」とうらみて、例の、阿闍梨、大方世にしろしありと聞こゆる人のかぎり、あまた請じ給。みすほう、読経、明くる日より始めさせ給はむとて、殿人あまたまゐりつどひ、上下の人たちさわぎたれば、心ほそさのなごりなく頼もしげなり。(源氏物語 総角)

- (8) 「渡り来て語る人もや」と、待つべきにもなきを、

思ひわびては、「五年をだにすぐせ」と、さばかり留められしに、「げにさこそあるべかりけれ」など、せん方なくおぼゆるまゝに、この明くる朝より、千日のしやうじ始め給ひて、法華経万部読みたてまつらんとおぼして、人ぎ、にはともかくもの給はず、厳しう籠り居などし給はず、うちなどにもまゐらんをりは、うちまゐりいと大事ならざらんをりは、「さてもあれかし」とおぼして、例の大將殿の君には、「世中になほあるまじきさまに、度く夢に見え、心ほそければ、かゝるしやうじ始めて、経読みたてまつらんと思ふなり」と語りひ聞え給。(濱松中納言物語 卷の四)

(6) は、女君が八講の準備を年内に行うことをすすめたのに対して、衛門督はさつそく「明くる日」からその準備を始めたというものであり、(7) は、薫が大君のために祈禱や読経を、知らせを受け取った「明くる日」から始めさせるといふものである。ここでは、大君の病気が「重くなり給」とあって、急を要することから、「明くる日より」は翌日の早い時間からであると解釈できる。(8) も、千日の精進を夜が明けて、朝

から始めるというものである。

以上のことから、夜が明けることで新たな事態が展開する場合には「あくる」が用いられること、さらに、「あくる」は一日のうちの早い時間を指すことがわかる。また、次の用例も同じように考えられる。

(9) 明け行ほどの空に、妻戸おしあげ給て、もろともにいざなひ出でて見給へば、霧りわたれるさま、所からのあはれ多く添ひて、例の、柴積む舟のかすかに行かふ跡の白波、目馴れずもある住まひのさまかなと、色なる御心にはをかしくおほしなざる。(中略)道すがら、心ぐるしかりつる御気色をおほし出でつゝ、たちも返りなまほしく、さまあしきまでおほせど、世の聞こえを忍びて帰らせ給ほどに、えたはやすくも紛れさせ給はず。御文は、明くる日ごとに、あまた返りづつたてまつらせ給。(源氏物語 総角)

この「明くる日ごと」については、『新日本古典文学大系』の注と、『新編日本古典文学全集』の現代語訳では、ともに「毎日毎日」とされている。ここでは、日が変わるごとに新た

に手紙を送ったのだから、これまでの用例と同じように、夜明けとともに日々新たな事態が生じていることになる。また、頻繁に手紙がおくられていることから、一日のうちの遅い時間から手紙を送り始めるとは考えられず、夜が明けて朝のうちからと解釈される。

「あくる」は、(1) から (9) のように、翌日の早い時間から新たな事態が始まる場合だけではなく、前の夜から引き続く同じ事態が続く、そのまま夜明けを迎えた場合にも用いられる。これは、現在でも、「明くる日」を先行の文とつなげずに、その日の記述を、「明くる日は、……」の形ではじめることもあり、逆に、どのようにして翌日をむかえたかを示すために、「前夜遅くまで仕事をして、明くる日は、……」「遅くまで仕事をした明くる日は、……」のように、連用修飾語や連体修飾語を用いて、前日・前夜の記述の最後に、「明くる日」を用いることもあるのと同じである。そこで、次に、後者の場合、前日から翌日をむかえるにいたった過程を述べる文において、「あくる」がどのように用いられているのかを見ることにしたい。

(10) かくて、二月中の十日、年の初めの庚申出で来たる

に、東宮の君たち、御局ごとに。(中略)。宮、「この雁は、いづちぞや」とのたまふ。(中略)。
左衛門佐、

鳴く雁に浮かべる雲の行き交ひていづくに待つと
契り置きけむ

など、これかれのたまひて、明くるつとめて、女の装
ひかづく。(うつほ物語 あて宮)

これは庚申の夜、「『この雁は、いづちぞや』とのたまふ」につづいて、それぞれが歌をよみながら、物忌みがあけるのをまつて、早朝にかずけものを賜ったことを表している。

(11) 真言院の律師して、孔雀経の御誦経行はせなどとして
思し騒ぐに、二十三日の昼つ方より悩み始めたまひ
て、その夜、夜一夜悩みたまふ。いとほしがり騒ぎ
て、大宮、尚待のおとど渡りたまひて、明くる日、
一日悩み暮らしたまへば、民部卿の北の方、大殿の、
子生みたまひていくばくもなければ、肖物にとて聞
こえたまひければ、渡りたまひぬ。(うつほ物語

国譲 下)

これは、女一宮が難産に苦しむという状態が夜明けまで続き、さらにそれ以後もその状態が続いているというものである。この「明くる日」も、「夜一夜悩みたまふ」と、苦痛のなかで夜明けを迎えた日であることを表している。このことは副助詞「まで」が「あくる日」に下接した場合に、より明らかになる。

(12) 大将、「日ごろ内裏に候ひはべりて、夜昼御書仕う
まつりはべりて、一日なむまかではべりし。やがて
候はむとせしかど、あくる日まで候ひて、乱り心地
のいと悪しくはべりしかば、(中略) 聞こえさすべ
きことも多く侍り」。(うつほ物語 蔵開 中)

これは、先祖の遺文を帝の前で講書するため参内していた仲忠が、自分の父親に近況報告をしている場面である。『新編日本古典文学全集』では、傍線部前後を、『この数日、宮中に伺候しづめで、夜昼講書の役でお仕えいたしました。先日退出いたしました。そのままこちらにまいろうと思いましたが、徹夜いたしましたので、……』のように現代語訳している。

この場面に先だって、仲忠が明け方まで講書をしている記述

がある。仲忠が退出する日の前日は、午前十時ごろから講書を始めたが、日が暮れても、帝は、「いと日高う始めつ。さらにな立ちそ」と言つて、仲忠にそのまま続けさせる。そのうちに「暁」になり、さらに「明け離れぬ」と記されている。ここでも、「あくる日」は、前夜から同じ状態で夜明けを迎えたその「日」であることを表している。

(10) (11) (12) に共通するのは、前日・前夜から同じ動作や状態のまま夜明けを迎えた「日」や「つとめて」である点である。このように、「あくる」はその動作や状態が継続しているなかで、夜が明けたことを示すことができる。なお、一晩中動作や状態が継続し、そのまま夜明けを迎える場合であっても、「あくる」ではなく、「またの」が用いられることがある。次章の(19) (20) の場合がそれであるが、それらはいずれも、単に翌日の意を表すものであって、この場合とは異なっている。以上、「あくる」に日時を表す語が下接する例を取りあげ、その使われ方を見てきた。その結果、次のことがいえるようである。

夜が明けることによつて、前日・前夜とは異なる新たな事態が発生する場合、または、前日・前夜の事態が続くうちに夜明けを迎えた場合に、その日は「あくる」によつて表される。

また、「あくる」には「つとめて」「あした」などが下接するが、それらが下接しない場合でも、夜明け、もしくは朝などの一日のうちの早い時間を表している。このことは、「昼つかた」「夕つかた」「夜」などが「あくる」に下接する用例が見出せなかつたことからわかる。

第三章 「またの」「またの日」

「また」は、副詞として、 \wedge その外に \vee \wedge その上に \vee などの意を表すが、「またの」の形に、日時を表す語を伴つて、「またの日」「またのつとめて」「またのあした」「またの夜」などの形をとることができる。以下に、平安時代の和文において、これらの語がどのような場合に用いられているかを考察する。「またの日」は、過去のある時を基準とした翌日の意を表すために用いられた。

(1) 暗う出で給て、二条より洞院の大路ををれ給ふほど、
二条の院の前なれば、大将の君いとあはれにおぼされて、櫛にさして、

ふりすててけふはゆくとも鈴鹿河八十瀬の浪に

袖はぬれじや

と聞こえ給へれど、いと暗うものさわがしき程なれば、又の日、関のあなたよりぞ御返しある。

鈴鹿河八十瀬のなみにぬれくず伊勢までたれか
思ひおこせむ

こそぞぎて書き給へるしも、御手いとよししくしくなまめきたるに、あはれなるけをすこし添へ給へら
ましかば、とおぼす。(源氏物語 賢木)

(2) ことはじまりて、一切経を蓮の花の赤き一花づ、に入て、僧俗、上達部、殿上人、地下、六位なにくれまでもてつきたる、いみじうたふとし。導師まゐり、講はじまりて、舞などす。ひぐらし見るに、目もたゆく、くるし。(中略)

又の日、雨の降たるを、殿は、「これになん、おのが宿世はみえ侍りぬる。いかゞ御覧ずる」ときこえさせ給へる、御心おこりもことわりなり。(枕草子 二五九段)

(3) 中将、うち笑ひて、

わりなしや強きによらむ勝ち負けを心ひとつに
いかゞまかする

といらふるさへぞつらかりける。

あはれとて手をゆるせかし生き死にを君にまか
する我身とならば

泣きみ笑ひみ語らひ明かす。

又の日はう月になりなければ、はらからの君たちの内にまゐりさまよふに、いたう屈じ入りてながめ
るたまへれば、母北の方は涙ぐみておぼす。(源氏

物語 竹河)

(1) は、源氏と御息所が歌のやり取りをした場面であるが、前日の歌に対する返歌が翌日に送られてきたというものである。
(2) は、道隆が、折からの雨に、昨日の供養に雨が降らなかつたのは、自分の宿世が見えるようですと前日をふりかえつていったものである。(3) は、叶わぬ恋を語らい明かした翌日の彼らの行動を述べたものである。このように過去の時を基準とした翌日の意は、「あくる日」ではなく、「またの日」で表されている。

また、「あくる日」が「つとめて」「あした」などの語が下接しない場合にも、一日のうちの早い時間を表すのに対して、「またの日」は、翌日に起こった事態の時間が限定されず、「つ

とめて」「あした」などが下接しない限り、朝から夜までの時間を表すことができる。このことは、「またの日」に格助詞「より」や「まで」が下接する用例によって明らかである。

- (4) 大将の君、「天の下は逆さまになるとも、かくなりたまふ世を見むずらむとなむ思はざりし。世の中のかくはかなければこそ、けしからぬ童べの行く先思ひやられて、後ろめたう覚えはべれ。おとどはそこにもせずなりたまひにけるまたの日より、思し惑ひて、それに御病はじまりて、早くむなしくなりたまひにき。親に知られたてまつりたまひてこそ、かかる道には思し立たましかど、親すでに思ひに堪へたまはずなりにしかば、不孝の罪とやなるらむとなむ」。(うつほ物語 春日詣)
- (5) たきものの香、いと心にくし。五月のなが雨のころ、上の御局の小戸の簾に、斉信の中将のよりの給へりし香は、まことにをかしうもありしかな。その物の香とおほえず、おほかた雨にもしめりて艶なるけしきの、めづらしげなきことなれど、いかでかいはではあらむ。

又の日まで御簾にしみかへりたりしを、若き人などの世にしらず思へる、ことわりなりや。(枕草子 一八九段)

(4) は、忠こそが父親のもとに來なくなった翌日から徐々に病氣になり、ついになくなつた、というものである。(5) は、斉信の中将がもたれて御簾に残していったよい香りが、次の日までそのまま残っていた、というものであつて、(4)(5)では、翌日の時間は限定されていない。そのため、「またの日」には、△早朝・朝・昼・夕・夜▽の意を表す語を伴うことができる。

(6) されば、「日や暮るる」と、いつしかいきて、あひにけり。またのつとめて、男、

天の川今宵もわたる瀬もやあると雲の空にぞ身はまどふべき

返し、女、

七夕のあふ日にあひて天の川たれによりてか瀬をもとむらむ

と言へり。(平中物語 一三三)

(7) わが御心ながらも、ゆくりかにはあはつけきことおぼし知らるれば、いとよくおほし返しつゝ、人もあやしと思ふべければ、いたう夜もふかさで出で給ぬ。

(中略)

またのあした、御文とくあり。なやましがりて臥し給へれど、人々御硯などまゐりて、「御返りりとく」と聞こゆれば、しぶしぶに見たまふ。(源氏物語 胡蝶)

(8) かくて、その日は九日なり。(中略) かかるほどに、夜いたく更けぬ。(中略)

かくて、源中納言の奉りたまへりしかづけ物ども、いまだ使はれぬを、女御の君、取り出でたまひて、御簾のもととなる人々に一具つ持たせて、うちそよめかせたまへば、中納言、うちをやをら手さし入れて取りつつ、まづあるじのおとどよりはじめてまつりて、次々にかづけたてまつりたまふ。

かくて、またの日の昼つ方になりて、御乳付け帰りたまふ。贈り物、いと清らにしまふ。(うつほ物語 葦開 上)

(9) 「ゆるさるばかり、歌一つかうまつれ。親のかはり

に、初子の日なり、よめく」と、せめさせたまふ。

(中略) おほとのごもりたる宮たちを、ひきあけつ、見たてまつり給ふ。「野辺に小松のなかりせば」とうち誦じたまふ。あたらしからんことよりも、をりふしの人の御ありさま、めでたくおほえさせ給。

又の日、夕つかた、いつしかと霞みたる空を、つくりつゞけたる軒のひまなさにて、たゞ渡殿の上のほどをほのかに見て、中務の乳母と、よべの御口ずさびをめできこゆ。(紫式部日記)

(10) さて、男も女も、おのおの歸りて、男、尋ねておこせたる、

もしきの袂の数は知らねどもわきて思ひの色ぞこひしき

かくいひいひて、あひにけり。

そののち、文もをこせず、またの夜も来ず。(平中物語 三八)

(6) は、七夕の翌日の早朝、男から女へ昨夜のように今夜も会いたいと手紙を送ったというものである。(7) は、源氏が養女である玉鬘に思いを告白したものの、よく自制し、女

房たちに怪しまれないようにあまり夜が更けないうちに出たが、その翌朝、源氏から玉鬘のもとへ手紙が届いたというものである。(8)は、女一宮がいぬ宮を出産し、その九夜の産養では、夜が更けた後祝宴が催され、かずけ物が与えられたというところでその日の記述が終わっている。「又の日」以下の部分は、その翌日、昼ごろに授乳役の女性が帰ったというものである。

(9)は、初子の日の翌日の夕方に、作者と中務の乳母が前日の道長の口ずさみを思い出して褒めたものである。(10)は、後の宮の女房が言い寄ってきた男と一夜をとにもするが、翌日の夜は姿を見せなかったというものである。

このように、「またの」「またの日」には、「つとめて」「あした」「昼つ方」「夕つ方」「夜」などの語をともなう例が見られ、それらは、夜明け以降、朝から夜までの広い時間をさしていると考えられる。

さらに、「またの日」には、直前の事態を指す「その」や、連体修飾語が上接する用例が存在する。それによって、「またの日」が、何を基準とした翌日であるのかを表すことができる。

(11) 大将殿は、にふだうの宮の悩み給ければ、石山に籠

り給て、さわざ給ころなりけり。さて、いとゞかし

こをおぼつかなうおぼしけれど、はかゞしう、さなむと言ふ人はなかりければ、かゝるいみじきことにも、まづ御使のなきを、人目も心うしと思に、御莊の人なんまゐりて、しかゞと申させれば、あさましき心ちし給て、御使、そのまたの日まだつとめてまゐりたり。(源氏物語 蜻蛉)

(12) 御仏名のまたの日、地獄絵の御屏風とりわたして、

宮に御覽せさせ奉らせ給。(枕草子 七七段)

(13) 野分のまたの日こそ、いみじうあはれにをかしけれ。

(枕草子 一八八段)

(11)は、薫の山莊の使者が、石山にいる薫に浮舟の失踪と葬儀を伝えた翌朝、まだ早いうちに、薫からの弔問の使いが宇治に参上したというものである。(12)は、仏名会の翌日、帝がわざわざ地獄絵の屏風を取り出したというものである。(13)は、台風の翌日はたいへん趣きがあり面白いというものである。これらは、前日を基準として、その翌日について述べたものである。それに対して、「その」や連体修飾語が「あくる」に上接した用例は見出すことができなかった。

また、「またの」は、仮定された日の翌日をさす場合にも用

いられる。

(14) 内裏よりも久しく消息も見えねば、おとど、このこと
と実に定まりなば、またの日法師になりなむ。(う

つほ物語 国譲 下)

「このこと」とは、正頼の娘であるあて宮の子どもが立坊せず、梨壺の子どもが立坊することであるが、もし、これが噂通りに決まったら、翌日出家しようというものである。このように、仮定された日の翌日を表す場合には、「またの」が用いられ、「あくる」は用いられない。

次に、係助詞「も」が、「またの日」に下接した場合の用例をあげる。

(15) 心ちにもおもひあたることを、人もいひければ、心
うく悔しとおもひて泣きけり。その夜、もしもやとおもひて待てど又来ず。又の日も文もおこせず。す
べて音もせで五六日になりぬ。(大和物語 百三)

(16) 暮るれば、御堂に上りて、またの日もをこなひ暮らし給。
(源氏物語 玉鬘)

(17) おほやけに相撲のころなり。をさなき人、まゐらま

ほしげに思ひたれば、装束かせて出だしたつ。「ま
づ殿へ」とてもものしたりければ、車のしりに乗せて、
暮にはこなたざまに物したまふべき人のさるべきに
申つけて、我はあなたさまにと聞くにもましてあさ
まし。またの日もきのふのごと、まゐるままにえし
らで、夜ざりは所の雑色これらかれら、これがおく
りせよとて、先立ちて出でにければ、ひとりまかで
ていかに心に思ふらん、例ならましかばもろともに
あらましをと、をさなき心地に思ふなるべし、うち
屈したるさまにて入り来るを見るに、せんかたなく
いみじく思へど、何のかひかあらん。(蜻蛉日記
中 九三)

(18) 霜月の廿よ日、石山にまゐる。雪うちふりつ、道
のほどさへをかしきに、逢坂の関を見るにも、むか
しこえしも冬ぞかし、と思いでらるゝに、そのほど
しも、いと荒うふいたり。(中略) 又の日も、いみ
じく雪ふりあれて、宮にかたらしきこゆる人の具し
給へるとものがたりして、心ほそさをなくさむ。

(更級日記)

(15) は、後掲の(19)と同じ段のそれより後ろの部分であるが、夜、もしかして来るかもしれないと待っていて、平中は来ず、翌日も音さたなしたつたというものである。(16) は、長谷寺へ参詣した玉鬘が、日が暮れると御堂に入つて修行をし、翌日も修行をしたというものである。(17) は、朝廷に相撲を見に行つた兼家と道綱だが、兼家は自分で道綱を家まで届けず他人に送らせ、翌日も同じように他人に道綱を送らせたというものである。なお、ここでは、「きのふのこと」のように、「きのふ」が、「またの日」と対になつて、ある過去の時点を基準にした前日を表すのに用いられている。(18) は、石山寺へ向かう道中、雪が吹き荒れ、翌日も雪がひどく降つたというものである。このように、「またの日」が「も」を伴つて用いられることによって、前日とその翌日に同じ事態が生じたことを表すことができる。

前章において、現代文の例をあげ、現代語の「あくる日」が文章を展開するために、当日の記述のはじめの部分におかれる場合と、前日・前夜につづいてどのようにして翌日をむかえるにいたつたかを述べる部分に用いられる場合があることについて見た。そして、平安時代においても、「あくる」は、そのいづれにも用いられていることを見た。そこで、つぎに、「また

の日」がどのように用いられているかについて見ることにしたい。この章の以上にあげた用例は、「またの日」が、当日の記述のはじめの部分におかれる場合であつた。それに対して、次にあげる用例は、前日から事態が変わらないままで夜が明けた後、「またの日」へと続くものである。

(19) といたう人々懸想しけれど、思あがりて、男などもせでなむありける。されど、せちによばひければあひにけり。そのあしたに文もおこせず。夜まで音もせず。心うしとおもひあかして、又の日待てど文もおこせず。(大和物語 百三)

(20) 京には、夜もすがら、例よりはおほつかなう思ひ明かし給て、又の日、いつしか、御文遣したるに、門も鎖して人の音もせぬに、怪しくて叩けば、いみじげなる下衆ぞ出で来たる。(狭衣物語 卷一)

(19) は、平中の訪れのないのを辛いと思ひ明かしたが、翌日も手紙さえ来なかつたというものであり、(20) は、飛鳥井女君のことを一晩思い明かし、物忌みのおわるのをまつて翌日、早々に手紙を送つたというものである。これらは、「心うしと

おもひあかして」「例よりはおほつかなう思ひ明かし給て」のように、夜を明かしたことが示されたうえで、それ以降の事態を「又の日」以下に述べたものである。

なお、これに似た状況を述べたものに、第二章の(10)(11)があるが、そこでは、「あくる日」によって表されている。それらは、その動作や状態が継続するうちに夜が明けたことを表しており、「またの日」の場合と違いが見られる。

ところで、蜻蛉日記には、「またの日」と「あくる日」が連続して用いられたり、一文に共起している用例が存在する。

(21) 三日、また申の時に一日よりもけにの、しりて来る

を、「おはしますく」といひ続くるを、一日のやうにもこそあれ、かたはらいたしと思ひつゝ、さすかに胸はしりするを、近くなればこゝなるをのことも中門おし開きて、ひざまづきてをるに、むべもなく引きすぎぬ。今日まして思こゝろおしはからなん。
またの日は大饗とての、しる。いと近ければ、こよひさりととも心みんと、人しれず思ふ。車のおとごことに胸つぶる。夜よきほどにて、皆かへるおともきこゆ。門のもとよりもあまたおひ散らしつゝ、行く

を、過ぎぬと聞きたびごとに心はうごく。かぎり聞き果てつれば、すべてものぞおぼえぬ。

あくる日まだつとめて、なほもあらで文見ゆ。返りごとせず。(蜻蛉日記 中 九九)

(22) 行きもてゆけば、粟田山といふ所にぞ、京より松明もちて人來たる。「この昼、殿おはしましたりつ」と言ふをきく。いとぞあやしき、なき間をうかゞはれけるとまでぞおぼゆる。「さて」など、これかれ間ふなり。我はいとあさましうのみおぼえて、來着きぬ。(中略)

またの日はこうじ暮らして、あくる日、をさなき人「殿へ」と出で立つ。(蜻蛉日記 中 八五〜八六)

(21) は、兼家が作者の家に立ち寄らずに素通りしてしまつたが、その「またの日」も兼家は寄らずに行つてしまつた。その「あくる日」の朝早く、兼家から手紙がきたが、返事はしなかつたというものである。ここでも「またの日」は翌日を表し、「あくる日」は、夜が明けて新たな事態が生じた日を表している。(22) は、唐崎からの帰り道のくだりである。唐崎から帰つ

てきた「またの日」は、一日中旅の疲れがとれずに過ぎしたが、その「あくる日」には、朝早くから道綱が兼家のところへ出かけて行った、というものである。

以上、「またの」に日時を表す語（日・つとめて・あした・夜）が下接するものを取りあげ、その使われ方を考察してきた。その結果はつぎのようにまとめることができる。

過去または仮定された時点を基準にして翌日の意を表すには、「またの日」が用いられる。前日から同じ状態や状況で夜が明けた場合であっても、「あくる日」はその過程のなかで夜が明けたことを表すのに対して、「またの日」は、そのような限定をうけず、単に翌日の意を表す。

また、「またの日」は、過去の基準となる時点を指す「その」や連体修飾語によつて、その翌日の意を表す。この用法は、夜明けを契機として、新たな事態の出現を表す「あくる日」には見出せない。

さらに、「またの」「またの日」に時間を表す語が下接する場合は、「あかつき」以外の早朝から夜までの、どの時間を表す語も可能である。これらは「あくる」のように夜明けを契機としているのではなく、翌一日のいずれの時間をも示すからであると考えられる。

第四章 「つぎの日」

「つぎ」はハあとにつづくものVという意の名詞であるが、平安時代において、「つぎの」に下接し日時を表す語には「日」がある。本章では、同じく翌日を表す「つぎの日」と「またの日」を比較し、両者の違いを考察することにする。

今回の調査では、「つぎの日」の用例は三例見出すことができた。そのうちの二例は次のとおりである。

- (1) かくいふ程に長徳二年になりぬ。二三月ばかりになりぬれば、こそあさましかりし所どころの御はてども、あるは同じ日、あるは次の日などうち統きてこ、かしこおほし営みたり。(榮花物語 巻第四)
- (2) まゐり音声、高御座山、

万代は高御座山動きなきときはかきはに仰ぐべきかな (中略)

まかで音声、野州川、
すべらぎの御代をまちでて水澄める野州の川波
のどけかるらし

十)

たまふ。例のごと厳めし。上達部はみな例の人々なれば、御方殊に見たまはず。右のおとどばかりぞ、客人にてもものしたまへる。

またの日は、右の大殿の、いと厳めしうしたまふ。
(うつほ物語 国譲 中)

(1)の「ござあさましかりし所どころの御はてども」は、前年に道隆・道兼以下、主人を亡くした家々の一周忌のことであるが、二月三月になると、その一周忌が、あるところでは同じ日に、あるところでは次の日にと、順次行われたということである。(2)は、長和元年の大嘗会であつて、数日にわたつて行われるものであるが、毎日「まゐり音声」で始まり、「まかで音声」で終わるといふ定まった次第に従つて行事が進められることを表している。

これと比較するために、「またの日」が用いられた行事の用例を示す。

(3) かくて、今日は太政大臣の大饗に、みな参りたまひ

ぬ。またの日、左の大殿のしたまふべけれど、忌ませたまふことありて明日なり。(うつほ物語 国譲 上)

(4) かうて、今日は左の大殿の大饗、やがてこの御方の御前にて、寝殿面白く、造りざま厳めしければ、し

(3)は、今日は太政大臣の大饗が行われ、「またの日」は左大臣の大饗が行われるはずであつたが、忌むべきことがあつたので、翌日行われる、というものである。(4)は、今日は左大臣の大饗が行われ、「またの日」は右大臣の大饗が行われたということであつて、いずれも時の経過に従つて記述され、翌日の意を表している。

次の例は、一文に「つぎの日」と「またの日」が共起しているものである。

(5) はじめの日は先帝の御料、つぎの日は母後の御ため、またの日は院の御料、五巻の日なれば、上達部なども、世のつ、ましさをえしも憚り給はで、いとあまたまゐり給へり。(源氏物語 賢木)

これは、中宮（藤壺）が主催する法華八講についての叙述であるが、その「はじめの日」は父帝のため、「つぎの日」は母后のため、「またの日」は夫桐壺院のために供養を行った、ということである。これも、(1)(2)と同様に、一定の順序のつとり供養が行われたと考えられる。父母は一对のものであるため、二日目の母后の供養は「次の日」で表されたと考えられる。夫の供養の日である三日目は、一对である父母とは異なる存在であるため、「またの日」によって表されたと考えられる。

このように、一定の順序に従って展開される場合は、「つぎの日」が用いられ、時の経過にしたがって翌日を表す場合には、「またの日」が用いられている。

しかし、「あくる」や「またの」が、「つとめて」「あした」などを下接するのに対して、「つぎの」にはそうした用例は少ない。今回の調査では、『うつほ物語』は『新編日本古典文学全集』を用いたため、これに該当する例は見られなかったが、『日本古典文学大系』の『宇津保物語』には、「次の夜」の用例が見える（注2）。

(6) こ、は人々仲頼、行正、仲忠、右近の少将二人、
受領どもなど数知らず多かり。

たうとうしは、初めの夜は近江の守、次の夜のもの
は津の守。（宇津保物語 十一）

第五章 まとめ

「あくる日」は、過去または未来のある時を起点とした翌日の意で現在でも用いられている。「またの日」は、翌日の意で平安時代にはさかんに用いられたが、中世に入るとその使用頻度は低くなり、江戸時代にいたっては、ほとんど見出せない（注3）。しかし、現代では、「またの日」が「いつの日か」の意で用いられていることを考慮すると、中世から江戸時代にかけて、まったく使用されていなかったというわけではないと考えられる。また、平安時代においては、「またの日」は、翌日の一日を指し、「昼つ方」や「夜」などを下接させることによって、「暁」以外の一日のうちどの時間をも表すことができたが、「あくる日」は翌朝の早い時間だけを表した。このような「またの日」の柔軟性が現代語の「またの日」の意味へとつながっているのではないかと考えられる。また、「つぎの日」は、一定の順序に従う事態が起きる場合の翌日を表すことができる。平安時代において「またの日」によって表された翌日は、時

代が下るにつれて少しずつ「あくる日」にとつてかわられたのであるうか。さらに近年においては、「あくる日」が「つぎの日」にとつてかわられようとしている。本稿では平安時代における「またの日」「あくる日」「つぎの日」について考察したが、通時的に考察することは今後の課題としたい。

【注】

注1 本稿で引用した用例の出典は次のとおりである。

『竹取物語』新日本古典文学大系十七 堀内秀晃・秋山虔校注 岩波書店

『伊勢物語』新日本古典文学大系十七 堀内秀晃・秋山虔校注 岩波書店

『大和物語』日本古典文学大系九 阪倉篤義・大津有一・築島祐・阿部俊子・今井源衛校注 岩波書店

『うつほ物語』新編日本古典文学全集十四・十五・十六 中野幸一校注・訳 小学館

『落窪物語』新日本古典文学大系十八 藤井貞和・稲賀敬二校注 岩波書店

『堤中納言物語』新日本古典文学大系二十六 大槻修・今井源衛・森下純昭・辛島正雄校注 岩波書店

『源氏物語』新日本古典文学大系十九・二十・二十一 柳井滋・室伏信助・大朝雄二校注

『源氏物語』新日本古典文学大系二十二・二十三 鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎校注 岩波書店

『枕草子』新日本古典文学大系二十五 渡辺実校注 岩波書店

『紫式部日記』新日本古典文学大系二十四 伊藤博校注 岩波書店

『土左日記』日本古典文学大系二十 鈴木知太郎・川口久雄・遠藤嘉基・西下脛一校注 岩波書店

『蜻蛉日記』新日本古典文学大系二十四 今西祐一郎校注 岩波書店

『和泉式部日記』新日本古典文学大系二十四 今西祐一郎校注 岩波書店

『更級日記』新日本古典文学大系二十四 今西祐一郎校注 岩波書店

『築花物語』日本古典文学大系七十五 松村博司・山中裕校注 岩波書店

『平中物語』新編日本古典文学全集十二 片桐洋一・福井貞助・高橋正治・清水好子校注・訳 小学館

『濱松中納言物語』 日本古典文学大系七十七 遠藤嘉基・松尾聰校注岩波書店

『狭衣物語』 日本古典文学大系七十九 三谷榮一・關根慶子校注 岩波書店

注2 『宇津保物語』 日本古典文学大系十一

注3 江戸時代の文献は「国文学研究資料館 日本古典文学本文データ ベース」を利用した。

(http://bases.nijl.ac.jp/Rcgi-bin/hon_home.cgi)

【参考文献】

古橋信孝「日本古代の時間―変化はどのように捉えられたか」

(『時間・ことば・認識』 ひつじ書房 一九九〇年十一月二十九日 初版)

三浦和雄「文法指導に必要な用例発見レポート24」(『文法特集 漢文訓読の問題点』 一月号) 明治書院 一九七一年

大久間喜一郎「時の万葉集」序説」(『時の万葉集』高岡市万葉歴史館編4) 笠間書房 二〇〇一年三月三十日 初版第一刷

(たてもと るりこ／本学大学院生)